環境保全活動への参加意識
―野鳥保護活動支援見学会を事例として―

淺野　敏久[*1]・森　　保文[*2]・前田　恭伸[*3]・犬塚　裕雅[*4]・伊藝　直哉[*5]

[*1] 広島大学大学院総合科学研究科
[*2] 国立環境研究所
[*3] 静岡大学工学部
[*4] 一般社団法人CAT
[*5] インテージ

Sense of participation in environmental practices: A case study of a bird-watching trip designed to support the conservation work for wild birds

Toshihisa ASANO[*1], Yasuhumi MORI[*2], Yasunobu MAEDA[*3],
Hiromasa INUDUKA[*4] and Naoya IGEI[*5]

[*1] Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
[*2] National Institute for Environmental Studies
[*3] Faculty of Engineering, Shizuoka University
[*4] General Incorporated Association CAT
[*5] Intage Inc.

Abstract

Many Japanese express considerable interest in environmental problems but few Japanese get involved in social action programs for environment. How do Japanese fill this gap between high level of environmental interest and low level of participation in social action? Keeping in mind this gap problem, we tried to clarify the ordinary people's sense of participation in environmental practices through a case study.

The target activity is a bird-watching trip aimed to enlighten the participants about the necessity of bird conservation and to get funds by donations from them. This activity expects two types of participation. One is to support economically by paying donation. The other is to support physically or mentally by becoming volunteer staff.

We did a questionnaire survey on the Internet, targeted at Hiroshima city residents. The questions were about the impression of this bird-watching trip, the intention to participate in this trip, the will of participation as volunteer staff, amount of donation, answerer's avocation and character, answerer's life style for environment and so on.

The findings are as follows.

1) Many answerers don’t recognize this activity as a bird conservation activity, but as a kind of environment educational tour program.
2) The rates of answerers who want to participate in the trip and to participate as volunteer staff are less than 10 percents. But the rates of answerers who mark “I could participate” attain 30-40 percents.
3) The amount of donation per head is 1,000-3,000 yen on average.
4) The character of answerers who want to participate as volunteer staff is quite different from that of answerers who agree to pay a high donation.
5) There is a trend that answerers who want to participate as volunteer staff lead an environmentally oriented life, have a sense of environmental crisis or accept constraints in order to conserve nature. They are enterprising persons. They like to camp, to take photos or to walk around mountains. On the other hand, answerers who agree to pay a high donation don’t show any significant characteristics.

Ⅰ　調査の目的と背景

地球環境問題においても，地域の環境問題においても，その解決に向けて，市民の自発的な参加がなければ前進することはない．日本では，市民の環境への関心は高いといわれる一方で，個人レベルの生活配慮行動を超えて，集団としての環境活動に参加する人は少ない．自然保護や環境保全の市民団体に参加して活動する人はさらに少なく[1)]，積極的な環境政策を後押しする十分な力を発揮できない．環境団体に参加するかどうかは別にして，これらの市民団体や地方自治体，企業その他が，ときには単独で，ときには協働で行う環境活動に，どうすれば多くの人が参加し，環境市民活動が継続的に発展することにつながるのか，ということに本研究の問題意識がある．

日本国民の環境への関心が高いというのは疑わしいとする声も耳にするが，世論調査などに，関心があると答える人が多いのは確かである．例えば，2009年に実施された「環境問題に関する世論調査」[2)]で，ゴミ問題に関心があると92.4％の人が回答し，自然に関心があると答えた人も91.7％に達した．この他にも環境意識についての調査はしばしば行われているが，それらの結果も同じようになっている．しかし，参加ということになると，2005年実施の「環境問題に関する世論調査」[3)]において，環境保全活動に参加したことがあると答えた人は44.1％と少なくなる．しかも，ここでの参加には，毎日の暮らしの中で環境保全の工夫や努力をすることも含まれるので，ボランティア活動など集団としての環境活動への参加はもっと少ないはずである．それは，同じ調査における，今後行いたい環境保全活動についての回答で，毎日の暮らしの中での工夫や努力が64.8％と圧倒的に多く，市民活動や行事に参加したいは15％，環境保全に必要な費用について協力したいが11.8％にすぎなかったことからも推測できる．また，2006年に行われた社会生活基本調査[4)]では，ボランティア活動に参加したことがある人は26.2％，自然や環境を守るための活動に参加したことがある人は6.5％であった．環境ボランティア活動に参加したい人が10～20％，実際に参加した人が5，6％程度というのは妥当なところであろう．

この世論調査の環境保全活動への参加意向は，2002年にも尋ねており，それと比べると，毎日の暮らしの中での工夫や努力の割合が高まったのに対し，市民活動や行事に参加したい人も費用面で協力したい人も減っている．環境活動に参加したい人や参加する人は，そもそも多くない上に，その数は増えそうにない．

しかし，その一方で環境保全を目的とするNPO

法人の数は右肩上がりで増えている[5]．つまり，ボランティアを必要とする場面は増えているのに，実際にボランティアをしたい人，する人は伸び悩んでいるのが現状である．そこで，人々の環境への関心は高いという状況をふまえて，環境への関心を持っている人たちにどのように環境活動への理解と，活動への参加を促していくのかを考えることが課題になる．その前提として，環境ボランティア活動への参加動機を理解することが必要になる．

ボランティア活動への参加動機を理解しようという研究について，桜井（2007）は先行研究をレビューし，利他主義動機アプローチ，利己主義動機アプローチ，複数動機アプローチの3つがあると整理している．

それによれば，利他主義動機アプローチは，伝統的なボランティアの参加動機観で，ボランティアを思いやりの行動とみる考え方であり，それに対して利己主義動機アプローチは，ボランティアへの参加に個人の利己的な満足感があるとする考え方である．ボランティアへの参加は，なんらかの見返りを期待してなされる行為であり，コストとベネフィットを天秤にかけて判断されているととらえる．桜井は続けて，この立場による研究には，ボランティア活動はその時の自分には直接的利益を生まないが，巡りめぐって結局は自分にメリットがあるだろうと考えて行われるとみる「交換理論」，限られた自分の時間や労力をボランティア活動に費やすことが，どれだけ自分の将来にプラスになるか，最終的に自分が何を得られるのかが重視される「投資理論」，ボランティアにとって活動自体がどれだけ有意義であったか，どれだけ満足であったかが重視される「レジャー理論」などがある，とまとめている．

そして，3つ目のアプローチとして，利他的か利己的かといった二項対立的な理解をするのではなく，利他的でもあるし，利己的でもあり，さらにはそれ以外の複数の次元によって，参加動機は構成される，とみる複数動機アプローチがある．桜井（2007）は，参加動機の複数の次元として，利他的動機や信念によって参加する態度，社会勉強や人生経験としてプラスとみて参加する態度，知人友人とのつきあいとして参加する態度，活動に参加することで知識や技能を試す機会になり，キャリア開発につながると期待して参加する態度，活動に熱中することで自分の問題を忘れたいといったネガティブな態度，自尊心や自己肯定観を高めるために高める行為として参加する態度が，先行研究等では支持されていると紹介している．

本稿では扱わないが，筆者らは環境活動への参加意識の分析をふまえて，ボランティアを獲得するための情報発信の仕方や，ボランティアをしたい人と必要とする現場とをマッチングする仕組み・仕掛けを開発したいという意図を持っている[6]．その前提として，環境活動への参加について，複数の異なるタイプや地域の事例を取り上げて，参加者の意識に関する調査を行っており[7]，本稿はその一つについてまとめたものである．

なお，調査の前提となる問題意識として，筆者らは，利己主義動機アプローチのコスト・ベネフィット論的な参加動機のとらえ方（複数動機アプローチでも主要な動機として利己主義的な動機が含まれる）を否定的にとらえている．日本において環境ボランティア参加が増えないのは，人々のコスト・ベネフィット感によるのではなく，環境活動への参加を求める情報が，環境について漠然とした関心がある程度の人たちに対して，適当な場面で適切な情報が発信されていないからであり，機会がうまく提供されれば，活動に参加する人はもっと増えるはずだという仮説に基づいて研究を進めている．

そのため，筆者らの研究において，環境活動への参加者の意識を調べ，参加動機に注目するのは，どの動機が重要か，どんな動機があるのかを明らかにするためではない．実際の参加において動機はそれほど重要な要素ではなく，動機よりも関心の有無が重要なことを示し，参加者の関心や環境行動情報に基づいたボランティア情報を発信する仕組みを考案すること（そのための基礎となるデータを収集すること）を志向している．環境活動への参加動機は，従来のボランティア研究で考えられているより，（俗な表現を使えば）「軽い」のではないかととらえている．実際に，一連の研

究の一つである森ほか（2008）では，ボランティア参加のコスト・ベネフィットは，参加開始時には有意なものの，純益観を金銭に換算すると，その値は極めて安いこと，また，活動を継続することとコスト・ベネフィットは関係しないことを示した．また，Mori et al.(2008)でも，ボランティアの参加は，必ずしも経済的な判断によってなされてはいないことを明らかにした．

この2つは静岡県浜松市で行ってきた水辺の環境保全に関わるボランティア活動を事例としたものなので，他の事例についても情報を集めることが望まれた．そこで，本稿では，別事例の情報を得るため，対象地域を広島県に変え，さらに，肉体労働的なボランティアではなく，参加することが環境活動を資金的に支援することにつながる活動（正確には寄付ではないが寄付行為的な活動）を対象とし，参加意識や活動に対する評価をアンケート調査によって調べることにした．

前置きが長くなったので，本稿の目的についてまとめる．本稿は，人々の環境への関心の高さと実際の環境活動への参加の少なさのギャップをどうすれば埋められるのかという問題意識を背景とし，また，参加動機よりも参加者の興味・関心を重視する立場に立つ．その上で，広島県内で行われている一つの環境活動を事例として，一般市民が，当該活動をどう評価するのか，活動への参加意向・支援意向を示す人がどのような環境への関心や志向性をもつのかを明らかにする．その結果を，本調査と並行して行っている環境ボランティア獲得手法の開発に関する研究を進める上での，基礎的な情報として活用することを意図している．

Ⅱ　調査について

1）対象とした活動

対象とした活動は，広島県内において野鳥保護活動に資することをめざして取り組まれている野鳥観察会（活動資金の獲得と野鳥保護意識の啓発，保護活動ボランティア勧誘を目的とした日帰りエコツアー）である．これは実際に行われている活動であるが，今回の調査では，実際の参加者を対象にするのではなく，この活動を単純化したモデルを想定して，それに対する一般市民の意識を，インターネットによるアンケート調査（以下，WEBアンケート調査）で調べた．

対象とした活動は，広島県北部でのブッポウソウ[8)]見学会と，瀬戸内海でのカンムリウミスズメ[9)]見学会である．これまで，民間の研究者や野鳥保護に関心のある地域住民等が，20年余にわたって，ブッポウソウの生態調査と巣箱かけなどの保護活動を行ってきた（飯田，1992，2001）．これまで，その活動費用を基本的に自弁してきたが，ブッポウソウの広島県内での生息数が回復してきたこと（飯田，2008）もあり，ブッポウソウへの理解を広く知らせることや，保護活動への理解･協力を広げるために，エコツーリズムの展開を模索することとした．そこで，2008年に広島大学大学院総合科学研究科の研究・教育プログラムの活動の一環として，モニターツアーを行った（浅野ほか，2008）．2009年以降は，その結果などをもとに，瀬戸内海での生息が近年確認されたカンムリウミスズメの見学もメニューに加えた，参加者を一般に募集する見学会を実施することになった．

見学会は，一般から参加者を募集し，年間に複数回行っている．参加者にはあらかじめ，参加費には交通費などの実費のほかに，野鳥保護活動への支援金が含まれている（アンケートの想定では10,000円の参加費のうち1,000円を支援金[10)]とした）ことを示し，保護活動の一環として行っていることを伝えている．この支援金やそれ以外のカンパなどを，ブッポウソウの巣箱制作費やカンムリウミスズメの調査費（漁船借り上げ代等）に充てて，保護活動を進める．また，この見学会を通じて，参加者に野鳥の現状や保護の必要性などを伝えられる．さらに，巣箱掛け活動や野鳥の生態調査，見学会のスタッフなど，今後の活動への参加も呼びかけられる．

なお，前述のとおり，今回の調査では，この見学会への参加者ではなく，この見学会を単純化した見学会モデルを，対象とした回答者（WEBアンケート調査に応じた広島市民）に示し，その参加意向を調べた．見学会参加者を対象としたアンケート調査は別途行っているが本稿では扱わな

い．市民を対象とした理由は，この見学会の参加者はそれほど多くなく（1年間に100名程度），実際には，参加者の大半が野鳥愛好家で，客層が偏っており[11)]，参加者を対象とするものとは別に一般的な参加意向を調べる必要を感じたからである．

ちなみに，今回の調査対象とした活動は，かなり特殊な設定のようにみえるが，世論調査では比較的支持されている「参加したい自然保護活動」である．2006年6月に実施された「自然保護と利用に関する世論調査」において，今後参加したい自然保護活動として，美化・清掃活動（64.8％）と植林などの緑化活動（42.5％）にはかなり及ばないものの，第3位に「自然観察会や探鳥会，自然体験ツアーなどの行事」（17.5％），第4位に「鳥の巣箱かけやえさ場づくりなどの野生生物保護活動」（12.6％）があがっている．

２）調査の概要

調査として，広島市民を対象としたWEBアンケート調査を行った．WEBアンケート調査は，市場調査などで現在よく使われており，個人情報保護の扱いが厳しくなる中，今後，増えていくと考えられている．回答者がインターネット利用者に限られるため，サンプルの代表性に問題があるが，選挙人名簿や住民基本台帳にアクセスできない状況で，かつ低予算で行える手段として，次善の策として評価できる．

広島市民に約13,000人のモニター（2009年4月時点）をもつ株式会社インテージに調査を委託し，20歳以上の男女を対象に500件以上回収するという条件で，683件の回答を得た．回収率次第で回答者層が偏る郵送法とは違って，男女比や年齢比は想定したとおりの構成比で回収される[12)]．

調査に当たって，まず，ブッポウソウとカンムリウミスズメとその保護活動について紹介し，参加費の一部を保護活動に充てるために，料金が実費プラス保護活動支援金になっていることと，1,000円分の支援金の使途について説明を読んでもらった上で，回答してもらった．

回答数は683通で，男性が50.7％，女性が49.3％，20代が21.3％，30代19.9％，40代22.1％，50代20.6％，60歳以上16.1％と，性別と年齢層についてのバランスは取れている．職業は，会社員・公務員が42.5％ともっとも多く，主婦・主夫が20.6％，パート・アルバイトが13.2％となった．世帯収入は，250万円未満が16.3％，500万円未満が34.8％，750万円未満が23.3％，それ以上が16.9％であった（8.7％が無回答）．

属性以外の質問項目は，ブッポウソウとカンムリウミスズメの認知度，見学会への参加意向，見学会の評価，重視する見学会の内容，支援金1,000円に追加してよい寄付金額，保護活動へのボランティア参加意向，今回の野鳥保護について本来望ましい費用負担のあり方，回答者の趣味，日頃行っている環境配慮行動，自身の性格や環境に対する意識，行事情報の入手方法（利用するメディア）である．なお，本稿では，必要と考えたものにのみ言及し，全ての結果に言及することはしない．

Ⅲ　調査結果

１）単純集計結果

ブッポウソウもカンムリウミスズメも認知度は低い．ブッポウソウについて，よく知っていた人は7.9％，カンムリウミスズメについては0.9％にすぎなかった．名前は聞いたことがある程度でも，それぞれ39.7％と15.2％である．ブッポウソウについては，広島県内での繁殖が新聞やテレビなどで報じられる機会が以前からあるので，最近瀬戸内海にいることが確認されたばかりのカンムリウミスズメよりは知られている．

次に，見学会への参加意向について，参加したい（「是非参加したい」＋「参加したい」）と答えた人は，いずれの場合も7％弱であった．ただし，「参加するかもしれない」まで含めると，約3割には受け入れられる余地がある（ブッポウソウで27.8％，カンムリウミスズメで27.2％）．参加意向では，認知度と違い，鳥の種類による差はほとんどない．なお，前述した2006年6月実施の世論調査では，今後参加したい自然保護活動として，自然観察会や探鳥会，巣箱かけやえさ場づくりなどの活動が15％前後の人に選ばれていた．それと比べると，本ケースは7％なので約半分の数字になっている（「参加するかもしれない」まで含めれば3

割なので世論調査の倍になる）．数字が低くなった理由として，対象とした鳥が認知度の低いレアな鳥であることや，この見学会では寄付が求められるといった条件がつくために敬遠されることなどが考えられる．

参加意向を示した（参加するかもしれないを含む）回答者204人を対象に，見学会の評価できる点を尋ねた結果を表1に示す．「そうだと思う」と強く肯定した割合が高かったのは，「地域の自然を見直すきっかけになる」，「自然への理解を深める」，「子供のよい経験になる」という環境教育的な項目であった．これに「まあそうだと思う」という肯定評価まで含めると，これら3項目に加えて，「野鳥保護に役立つ可能性がある」や「面白そう・楽しそう」の評価も高くなる．環境教育的な面での効果が高く評価され，保護にも役立つと考えられている．

ただし，保護に役立つことより，教育的な側面での評価の方が高いことに注目すべきである．見学会が保護活動につながることより，参加者にとっての学びの場になるとか，楽しい経験になるといったことの方が，活動の評価として支持されている．言い換えると，この活動への参加は，保護活動に関わる機会というよりは，興味・関心を満たす機会として認識される可能性が高い．一方で，ボランティアへの関心が高まるとか，社会的意義がある，地域活性化につながる，などの評価は相対的に低かった．

見学会で重視する内容（表2）を尋ねたところ，「とても重視する」の割合が高かったのは，「自然環境や保護活動の解説・ガイド」と「郷土料理・名物料理等の食事」の2つで，「まあ重視する」ま

表1　野鳥保護活動支援のための見学会に対する評価　（%：N=204）

	そうだと思う	まあそうだと思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない	わからない
面白そう・楽しそう	19.6	57.4	15.7	4.9	1.5	1.0
子供のよい経験になる	36.3	44.1	10.8	2.0	1.0	5.9
野鳥保護に役立つ可能性がある	31.4	54.9	9.8	2.5	0.5	1.0
野鳥の生息を脅かすおそれがある	9.3	23.0	32.8	26.0	4.9	3.9
自然への理解を深める	38.7	51.5	8.3	0.5	0.5	0.5
地域の自然を見直すきっかけになる	41.7	48.5	6.9	2.0	0.0	1.0
仲間が広がる	15.2	49.5	25.5	5.4	3.4	1.0
自分の居場所が見つけられる	4.9	15.7	39.7	25.0	11.3	3.4
地域住民との交流につながる	7.8	43.6	32.8	9.8	3.9	2.0
ボランティアへの関心が高まる	11.3	52.0	22.5	9.3	2.5	2.5
地域の活性化につながる	10.3	43.6	27.9	11.8	4.4	2.0
社会的意義がある	15.2	52.0	23.5	4.9	1.5	2.9

注）参加意向を表明した204人を対象とする．

表２　見学会の内容として重視すること　（%：N=204）

	とても重視する	まあ重視する	どちらでもない	あまり重視しない	重視しない	わからない
目当ての野鳥を必ず見られること	9.3	50.5	19.1	15.7	4.4	1.0
自然環境や保護活動についての解説・ガイド	17.6	63.2	14.7	2.9	1.0	0.5
地域住民との交流・意見交換	5.4	39.7	35.8	15.2	2.9	1.0
渓流や海辺での生きもの探しや釣り・カヤック等	10.3	49.5	24.5	13.2	2.0	0.5
巣箱かけや調査などの現地での保護活動体験	11.8	65.2	17.6	3.9	1.0	0.5
農漁業体験等のオプションメニュー	8.8	34.8	34.3	15.7	5.4	1.0
郷土料理・名物料理等の食事	14.2	40.7	27.9	14.2	2.5	0.5

注）参加意向を表明した204人を対象とする．

で含めると,「自然環境や保護活動の解説・ガイド」と「巣箱掛けや生態調査などの現地での保護活動体験」が8割前後と特に高い数字になった．前問で学びの場としての評価が高かったことを反映した結果といえる．見学会のオプションにすぎない食事へのこだわりが示されたことは, 参加が観光・レクリエーションととらえられていることの現れであろう．

活動資金を獲得することについて，参加費に含まれていた活動支援金に上乗せして支払ってよいと思う寄付金額を尋ねた結果を表3に示す．500～1,000円（はじめの1,000円をあわせると1,500～2,000円）が43.1％と最も多く, 500円未満（1,500円未満）が13.2％, 1,000～2,000円（2,000～3,000円）が12.7％，2,000～3,000円（3,000～4,000円）が11.3％となった．平均的にみると活動支援に1,000～3,000円程度は出してよいとみなされている．これは実際の見学会参加者におこなったアンケート結果や，野鳥への関心が高い人たちに対象を絞っておこなった淺野ほか（2008）の調査結果と同様の金額になっている．野鳥が好きかどうか，保護活動に関心があるかどうかなどの対象者の志向性とあまり関係なく，支援してよい金額は決まっているといえる．

ここまでは見学会への参加意向を示した人を対象とした質問であったが，次に対象者を全回答者に戻して，見学会への参加ではなく，保護活動にボランティア・スタッフとして関わる意向について尋ねた（表4）．その結果は，1割弱（1.6＋7.5％）の回答者が参加したいと答え，参加するかもしれないまで含めると約4割が肯定的な回答であった．スタッフ参加と前問の寄付について，次章で，日

表３　上乗せして支払ってよい寄付金額　（％：N=204）

金額	割合
0円（参加費以外支出したくない）	5.9
500円未満	13.2
500円以上1,000円未満	43.1
1,000円以上2,000円未満	12.7
2,000円以上3,000円未満	11.3
3,000円以上5,000円未満	6.9
5,000円以上10,000円未満	0.5
10,000円以上でもかまわない	0.5
わからない	5.9

注）参加意向を表明した204人を対象とする．
参加費にはすでに1,000円の活動支援金が含まれている想定になっており，それに追加してよい寄付金額を尋ねている．

表４　スタッフとしての参加意向　（％：N=683）

参加意向	割合
是非参加したい	1.6
参加したい	7.5
参加するかもしれない	32.9
あまり参加したくない	22.7
参加したくない	10.8
絶対に参加しない	3.2
わからない	21.2

注）全回答者683人を対象としている．

表５　行政や市民団体等の各種行事についての情報源　（％：N=683）

	よく活用する	やや活用する	どちらともいえない	あまり活用しない	活用しない
テレビ	23.3	38.5	14.5	11.9	11.9
ラジオ	3.8	13.8	18.0	23.0	41.4
新聞	17.1	38.8	17.0	9.5	17.6
雑誌・書籍	5.0	29.4	24.9	19.6	21.1
ポスター・チラシ・ダイレクトメール類	4.2	29.6	32.8	17.0	16.4
行政の広報紙	12.4	32.8	22.8	14.3	17.6
タウン情報誌	5.4	32.1	25.9	15.8	20.8
インターネットのWEBサイトなど	20.6	41.1	17.3	10.4	10.5
メーリングリストなど	3.2	16.3	28.3	23.3	29.0
講演会やイベント	0.7	9.4	25.5	29.1	35.3
知人・友人・家族の話（口コミ）	5.1	32.9	29.4	15.7	16.8
自治会の回覧板など	3.5	22.0	26.8	18.4	29.3
その他	0.3	0.3	22.0	8.5	69.0

注）全回答者683人を対象としている．

頃行っている環境配慮行動，自身の性格と環境に対する意識，回答者の趣味，その他属性データとの関連を検討する．

本稿では掘り下げて分析しないが，活動参加者やボランティアを獲得するために，どのような情報受発信の仕組みをつくるのかという問題意識を持っているので，その参考にするために，回答者の利用する主な情報源についても質問した（表5）．インターネットを通じた調査だったこともあり，インターネットのWEBサイトなどからの情報を利用しているとの回答がもっとも多く，ついで，テレビ，新聞，クチコミ，ポスター・チラシ類，タウン情報誌が利用されることがわかった．これは他の事例で調べている結果と同様な結果であった．

2）参加意向（スタッフ参加と寄付）と回答者属性との関連

次に，スタッフとしての参加意向（表4）と活動への寄付（表3）を異なる参加形態ととらえ，それぞれについて参加意向の高い人とそうではない人（寄付の場合は寄付金額の多寡）との違いについて，表6に示したA～Gまでの各変数との関

表６　スタッフ参加意向および寄付金額と回答者の環境行動ほかとの相関（独立係数）

		参加意向（N=538）			寄付金額（N=192）		
		独立係数	P値	カイ二乗検定	独立係数	P値	カイ二乗検定
A	日頃行っている環境行動（1を「よく取り組んでいる」とする1～5の5段階評価）						
A1	人のいない部屋等の照明をこまめに消す	0.1119	0.0631		0.1518	0.3501	
A2	古紙、ペットボトルなどはリサイクルにまわす	0.1283	0.0089	**	0.1158	0.8067	
A3	冷暖房の設定に注意する	0.1247	0.0143	*	0.1659	0.1977	
A4	買い物に行く時にはエコバッグを持参する	0.0946	0.2725		0.0979	0.9385	
A5	水筒やマグカップを持ち歩く	0.1171	0.0362	*	0.1294	0.6472	
A6	家電製品購入等で省エネ効果の高い製品を選ぶ	0.1388	0.0041	**	0.1463	0.4195	
A7	フェアトレード商品やエコロジー商品を購入する	0.1606	0.0000	**	0.1058	0.8917	
A8	環境問題について日常的に話題にする	0.1573	0.0001	**	0.1509	0.3613	
A9	講習会への参加などの学習・情報を収集する	0.1958	0.0000	**	0.1520	0.3472	
A10	身の回りの自然の様子や変化を気にかける	0.2024	0.0000	**	0.1180	0.7838	
A11	環境ボランティア活動に参加する	0.2101	0.0000	**	0.1608	0.2471	
A12	海外や地域での社会的活動等に寄付やカンパする	0.1893	0.0000	**	0.2529	0.0002	**
B	自分の性格や環境についての考え方（1を「よくあてはまる」とする1～5の5段階評価）						
B1	キャンプなど野外レジャーによく出かける	0.1600	0.0000	**	0.1165	0.7996	
B2	新しいことや変わったことをするのが好きだ	0.1878	0.0000	**	0.0987	0.9342	
B3	自分の性格は利己的というより献身的だ	0.1328	0.0047	**	0.1122	0.8404	
B4	世界の自然環境は危機的状況にあると思う	0.2027	0.0000	**	0.1048	0.8989	
B5	自然のために生活が制約を受けるのはやむを得ない	0.2243	0.0000	**	0.1378	0.5347	
C	性別（男性／女性）	0.0558	0.6428		0.1876	0.0800	
D	年齢（20代／30代／40代／50代／60代以上）	0.1041	0.1324		0.1610	0.2450	
E	家族構成（一人暮らし／夫婦のみ／2世代同居／3世代同居）	0.0769	0.6566		0.1591	0.2655	
F	職業（自営･事業主･農業／勤め人／パート･アルバイト／学生／専業主婦･主夫／無職／その他）	0.1198	0.1849		0.2761	0.0006	**
G	世帯年収（250万円未満／500万円未満／750万円未満／1,000万円未満／1,000万円以上／不明）	0.0883	0.6345		0.1843	0.1894	

注　**は1％有意，*は5％有意．
参加意向については全回答者683人のうち「わからない」と答えたものを除く538人を対象とする．寄付金額については、見学会参加意思を示した204人のうち「わからない」を除く192人を対象とする．
参加意向については，参加する（是非参加したい＋参加したい），参加するかもしれない，あまり参加したくない，参加しない（参加したくない＋絶対参加しない）の4区分，寄付金額については，500円未満，1,000円未満，2,000円未満，2,000円以上の4区分にまとめて計算した．

係をみる．表6は，スタッフ参加意向と寄付金額のそれぞれと，A ～ Gの各変数との関係について，変数間の相関を，独立係数を計算してまとめたものである．カイ二乗で有意となった変数間には低い相関が認められる．

なお，スタッフ参加と寄付とで回答者が異なる．前者では683人の全回答者を対象としているが，後者では見学会への参加意向を示した204人を対象としている[13)]．また，スタッフ参加意向については，参加する（是非参加したい＋参加したい），参加するかもしれない，あまり参加したくない，参加しない（参加したくない＋絶対参加しない）の4区分に，寄付金額については，500円未満，1,000円未満，2,000円未満，2,000円以上の4区分にまとめなおし，さらにそれぞれで「わからない」と回答したサンプルを除いて，A ～ Gまでの各変数との関係を調べた．A ～ Gの各変数の質問項目は，表6の表側に記載した．AとBについては，1をプラス（肯定的），5をマイナス（否定的）とする5段階評価としている．

スタッフ参加意向は，日頃行っている環境行動（A）と，自分の性格や環境についての考え方（B）のほとんどの項目との間に弱い相関が認められ，C ～ Gの属性データとの間には相関が認められなかった．係数が相対的に高かった変数は，「身の回りの自然の様子や変化を気にかける」，「環境ボランティア活動に参加する」，「世界の自然環境は危機的状況にあると思う」，「自然を守るために生活が制約を受けることもやむを得ない」であった．ボランティア・スタッフの参加意向なので，「環境ボランティア活動に参加する」との相関があるのは当然といえ，それに加えて，自然環境に対する危機感があり，身近な自然に関心のある人に参加意思のある人がいるというイメージを描ける．

一方，寄付金額の多寡に関しては，ほとんどの項目で変数間に有意な差を認められなかった．その中で，「海外や地域での社会的活動等に寄付やカンパをする」と「職業」のみに相関がみられた．表6からは，どのような関係になっているかはわからないので，この2項目についてクロス集計を行い，傾向を確認したところ，日頃寄付やカンパを行わない人は，寄付してもよいとする金額が低くなる傾向があり（しかし寄付やカンパをよくする人の寄付金額が高いわけではない），職業については，勤め人や自営業者の寄付金額が高く，専業主婦・主夫や学生，無職（リタイア層含む）で寄付金額が低くなった．それ以外の環境行動や環境意識と，どれくらい寄付をするかということは，ほとんど関係ないことが確認できた．

さらに，A ～ Gの変数の中で，スタッフ参加意向と寄付金額をよく説明するものはなにかを知るために，ロジスティック回帰分析を行った．その際，スタッフ参加意向について，参加する可能性のある人とない人の2区分になるようにデータをまとめ（参加可能性のある人＝参加する＋参加するかもしれない；可能性のない人＝あまり参加したくない＋参加しない），寄付金額についても，1,000円未満の人と1,000円以上の人の2区分とした．

スタッフ参加意向では，「環境ボランティア活動に参加する」と「新しいことや変わったことをするのが好きだ」，「自然を守るために生活が制約を受けることもやむを得ない」の3変数が有意な変数としてあがった（表7）．日頃，環境ボランティア活動に参加する人は，新たな活動にも関心を示す．また，新しいことをするのが好きといった個人の性格も参加につながる．自然のために生活面での制約をいとわない人は，自ら行動する意識ももつといえる．

一方，寄付金額の多寡については，相関のある変数がほとんどなかったことから予想されたとおりに，有意な変数がみつからなかった．寄付金額をいくらにするのかといったことは，環境配慮行動や環境意識などによらずに決まると考えられる．

スタッフ参加と寄付について，回答者の趣味との関連についても調べた．趣味に関する設問は，26種類の選択肢[14)]をあげ（その他と趣味はないの2項目を加えて選択肢は28），複数回答可で回答を求めた．選択肢にあげた各趣味を選んだか選ばなかったかという28変数と，スタッフとして参加する可能性のある人とない人，寄付金額が1,000円未満の人と1,000円以上の人との関係を，上記同様にロジスティックス回帰分析により求めた．参加する可能性のある人を説明する趣味として

表7　スタッフ参加意向と環境配慮行動等との関係

変数名	偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数
A1	0.0487	0.7367		0.0169
A2	－0.0582	0.6113		－0.0258
A3	0.1065	0.4248		0.0412
A4	－0.1647	0.1016		－0.0837
A5	0.1000	0.2381		0.0543
A6	－0.0797	0.5428		－0.0306
A7	0.2238	0.0964		0.0901
A8	－0.2800	0.0393	*	－0.1206
A9	0.0174	0.9113		0.0074
A10	0.1854	0.1489		0.0822
A11	0.4304	0.0057	**	0.1760
A12	0.1706	0.1601		0.0749
B1	－0.0126	0.8968		－0.0057
B2	0.4827	0.0000	**	0.2066
B3	－0.0755	0.5487		－0.0264
B4	0.1263	0.3833		0.0450
B5	0.5359	0.0008	**	0.1883
C	－0.0097	0.9662		－0.0019
D	－0.0917	0.2552		－0.0509
E	－0.1180	0.2782		－0.0435
F	0.1097	0.0789		0.0739
G	0.1019	0.1467		0.0584
定数	－5.5790	0.0000	**	

注）参加可能性あり287人，可能性なしは251人
寄与率0.1687，相関比0.2188

は，キャンプ，写真，ペットの飼育，山歩き，家庭菜園，クラシックコンサートが有意な変数としてあがった．野鳥観察やその保護活動を行うボランティアへの参加をそもそも想定しているので，キャンプや写真を趣味にしている人の関心をひいたと考えられる．一方，寄付金額の多寡については，家庭菜園と映画鑑賞を趣味にしている人はあまり多くの寄付をせず，散歩やその他のスポーツを趣味にする人は金額が高くなる変数となった．寄付金額の多寡については，趣味と保護活動の内容とはあまり関係ないようにみえる．

Ⅳ　おわりに

はじめに示したとおり，本稿の目的は，人々の環境への関心の高さと実際の環境活動への参加の少なさのギャップをいかに埋めるかという問題意識をもちつつ，一つの活動を事例に，市民が活動をどう評価するのか，また，活動への参加・支援意向を示す人が，環境にどのような関心や志向性をもつのかを明らかにすることにあった．その結果は前章までに示した．ここではまとめとして，2点述べてみたい．

一つは，環境活動への動員にあたって「客」としての参加を積極評価することについて，もう一つは労働をともなう参加と経済的な参加（支援）の違いについてである．

まず，前者に関連して，見学会にしてもスタッフ参加にしても，今回の案件では，是非参加したいとか，参加したいといった積極的な参加希望者が1割に満たなかったことに注目したい．この数字は，世論調査における探鳥会や巣箱かけ活動への参加意向と比べても半分を切っている．しかし，「参加するかもしれない」という層は比較的多く，表7の注記に示したように，参加しない人より参加する可能性のある人の方が多いのである．それではその層にどうすれば訴えられるのだろうか．今回の分析では明らかにはできていないが，一つのヒントが活動評価に現れていたように思う．

活動の評価として，見学会を保護活動としてみるより，環境教育の一環として提供されているサービスとしてみる傾向が強かった．言い換えると，見学会を手段とする野鳥保護活動に，参加者が主体的に関わる機会としてよりは，見学会において参加者が自然を学んだり親しんだりする機会として理解されている．アンケートに示された参加意向の低さは，対象とした鳥への馴染みのなさや，保護活動への寄付を伴う煩わしさが敬遠されたとも考えられる．環境への問題意識がどうであれ，対象となっている活動が，自分の興味･関心をひくかどうかは重要である．活動を評価する回答者は，「客」としての自分を想定している．

今回は，スタッフ参加のみならず，見学会の参加希望者も少なかったが，環境活動への参加を考える上で，参加者を「客」として受け入れることを重視すべきである．「参加するかもしれない」層は，「客」として呼び込まない限り参加しない．取り組むべき課題は，スタッフになってくれるボランティアをどうすればいきなり呼び込めるかで

はなく，「客」として来てもらった後で，「客」ではない関わり方をしてみたい，「主」の側になってみたいという意識転換を促すことなのではないだろうか．自分が客として通ううちに，自分が企画・実施する側になってみたいという気にさせるような，活動の魅力を感じさせることが求められる．

第二に，本稿は，活動のスタッフとして参加することと，寄付･カンパなどにより活動を支援（活動に参加）することとは，かなり違うことを明らかにした．

スタッフ参加意向をもつ人は，環境に配慮した行動を行っていたり，自然環境への危機意識を持っていたり，自然のために生活に制約があっても構わないと考えたりする傾向がみられた．また，新しいことや変わったことをしてみたいという性格や，キャンプや写真，山歩きなど，野鳥観察と近い趣味をもっている人が，相対的に多く関心を示すこともわかった．

一方，寄付金額の多寡は，環境配慮行動や環境意識とほとんど関係なく，むしろ収入の有無に左右され，普段から寄付･カンパをしない人はこの活動に対しても同様に対応することがわかった．ただし，日頃，寄付･カンパをよくするからといって多額の寄付をするわけではない．

両者は明らかに異なる傾向を示している．ここから示唆されることは，寄付を求めるような活動をアピールするターゲットや方法と，スタッフを求めるような活動をアピールするターゲットや方法を，別にしなければならないということである．環境活動への参加を促すために，活動の担い手側は，マーケティング的な視点･戦略を持つことが望まれ，あるいは外部にそれをサポートするような仕組み･仕掛けが必要になるかもしれない．

環境活動に関心のある人に，まずは「お客さん」として参加してもらい，活動を学びとして，あるいは楽しみとして体験してもらう．そのために，マーケティング的な方法を用いるなどして，広く的確に情報を発信していくことが必要となり，そのために市場のニーズをつかまなければならない．商売であれば至極当然のことが，環境活動への人材の獲得という場面において，ほとんど考えられておらず，多くの場合，環境活動を行う側の都合，参加者やボランティアを募集する側の都合で情報発信や参加者募集が行われている．まずは，環境活動に参加したい人の関心を把握することから始めることが，環境への関心を持っている人と実際に活動に参加する人との間のギャップを埋めることにつながるのではないだろうか．あまり戦力にならない「お客さん」気分の参加者を受け入れた上で，その中の一部の参加者に，活動とかボランティアなどについて考えてもらう（考える機会を持たせる）ことが，一つの解決方向なのではないだろうか．アンケートの結果に示されたとおり，環境配慮行動を取っている人は，活動へのスタッフ参加意向を持っている．その意向をどう酌み取っていくのか，「客」として呼び込んだ後に，「主」としての参加にどうすれば展開できるのかを考えなければならない．

本研究の一部は，科学研究費補助金(19651015，萌芽研究，代表者：前田恭伸)により実施した．

注

1）岡島（1990）はアメリカ合衆国の環境保護運動団体の会員規模が日本の団体と2ケタ違うことを紹介し，今泉（2001）はドイツの環境団体の支持層の広がりと活動の活発さを，小島・眞（2007）は海ゴミ問題に関連して，人口の少ない韓国の団体が日本の団体よりも大きく，国際的な活動も盛んなことを指摘している．

2）内閣府（2009）『環境問題に関する世論調査』（http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-kankyou/index.html：2010年9月9日検索）

3）内閣府（2005）『環境問題に関する世論調査』（http://www8.cao.go.jp/survey/h17/h17-environment/index.html：2010年9月9日検索）

4）総務書統計局（2006）『社会生活基本調査』（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001008017&cycode=0：2010年9月9日検索）

5）環境省資料．（http://www.env.go.jp/nature/ari_kata/shiryou/031208-3-9.pdf：2010年9月9日検索）

6）この調査は，平成19-21年度の科研費萌芽研究「ボランティア機会論に基づくマーケティングを応用した環境ボランティア獲得の為の情報システム開発」の一部として行ったものである．

7）その一部は，森ほか（2008）やMori et al.(2008)にまとめたほか，東京や茨城県などでも調査を行っている．

8）ブッポウソウは，嘴と足が赤いほかは，全身青緑がかった色で，ハトよりやや小型の鳥である．ユーラシア大陸東部に分布し，4月下旬頃に日本に渡ってきて繁殖し，冬に南方に渡る．絶滅危惧ⅠB類(EN)とされ，全国的に減少傾向にあるが，広島県や岡山県では巣箱による保護で繁殖個体数が回復している．結果として広島県への飛来数が全国でもっとも多くなっている．

9）カンムリウミスズメは，日本の離島で繁殖し，冬は洋上で過ごす．寒帯に多いウミスズメ科の中で唯一温帯に適応した種類で，ほぼ日本固有といえる．体長は25cmほどで，白黒のコントラストが美しい．絶滅危惧Ⅱ類（VU）である．これまで瀬戸内海には生息しないと考えられていたが，2007年に瀬戸内海西部での生息が確認された．

10）1,000円の支援金により，巣箱0.3個分，海上調査0.05回分の費用がまかなわれる．

11）このこと自体が，活動に参加した理由が，保護活動に協力・支援したいということよりも，鳥を見てみたい（それが保護活動を役立つならよりよいこと）ということによることの現れであり，本研究の視点である「ボランティア参加動機より日常的な興味・関心に注目する」方が活動参加者獲得に有効だということを如実に示している．

12）WEBアンケート調査の場合，対象となるモニターが広島市民一般を代表するのかに難があるものの，モニターの中では無作為に抽出されており，性別や年齢の偏りはでない．一方，郵送法の場合，住民基本台帳などからサンプルを無作為抽出したとしても，回収率が2割程度だと，その段階でのサンプルの偏りが出てしまうことになる（高齢者の割合が高くなる）ので，別の意味で代表性に問題が出てしまう．

13）見学会への参加意向を示した人でないと寄付金額を適切に回答しないのではないかとの懸念から対象者を絞った．また，見学会への参加意向を示した人の9割がスタッフ参加の可能性があることを回答しており，見学会参加意思のある層のスタッフ参加意向と他の変数とでは相関を分析できなかった．

14）選択肢にあげた趣味は，料理，キャンプ，読書，ドライブ，寺社仏閣めぐり，クラシックコンサート，家庭菜園，ロックコンサート，映画鑑賞，楽器の演奏，国内旅行，海外旅行，山歩き，陶芸，野球観戦，エステ・マッサージ，写真，ペットの飼育，淡水魚の飼育，フィットネス・ジム，博物館・美術館めぐり，散歩，サッカー観戦，ジョギング・ランニング，その他陸上・屋内スポーツ，水上スポーツ，その他，趣味はない，の28項目である．

文献

浅野敏久・朝格吉楽図・光武昌作・西原元基・竹本美紀（2008）：野鳥保護活動支援を目的としたエコツアーの実現可能性，環境科学研究，3，17-39.

飯田知彦（1992）：電柱を営巣場所にするブッポウソウEurystomus orientalisの繁殖分布，Strix，11，99-108.

飯田知彦（2001）：人口構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策，日本鳥類学会誌，50，43-45.

飯田知彦（2008）：広島県におけるブッポウソウの個体群保全の成功例．日本生態学会全国大会ESJ55講演要旨一般講演（口頭発表）A2-10, 203.

今泉みね子（2001）：『フライブルク環境レポート』中央法規.

岡島成行(1990)：『アメリカの環境保護運動』岩波書店.

小島あずさ・眞淳平（2007）：『海ゴミ』中央公論新社.

桜井政成（2007）『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房.

森保文・前田恭伸・淺野敏久・井田国宏（2008）：ボランティア参加のコスト・ベネフィット—佐鳴湖浄化のためのヨシ刈りを例として—，環境システム研究論文集（土木学会），36，pp.483-489.

Yasuhumi Mori, Kenzo Mori, Hiromasa Inuzuka, Yasunobu Maeda, Asano Toshihisa, Syogo Sugiura（2008）：Determination of volunteering based on a theory of volunteer opportunity, 環境科学会誌，21(5)，391-402.